

## 非母語話者日本語教師支援のために必要な品詞情報は何か

堀恵子 (東洋大学)  
江田すみれ (日本女子大学)  
山崎誠 (国立国語研究所)

### 1. 研究の背景と目的

第二言語において文を理解したり、生成したりする際には、文法構造を知り、それに合った要素を用いることが必要とされるため、各要素の文法カテゴリーに関する情報を知ることは必須である。また、言語教育においても、教師自身の文法理解や、学習者に対する文法教育、教材作成やテスト作成などの際にも重要であろう。

しかし、日本語教育では、日本語学に基づきつつ、言語教育の立場から必要な項目を立ててきたため、例えば国際交流基金ほか(2002)では、「いわゆる文法的な〈機能語〉の類」としているように、用語として一定していない。(国立国語研究所 2001, 国際交流基金ほか2002, など)。

海外の日本語教育機関においては、日本語教師の日本語能力の不足が依然として指摘されており(国際交流基金2013)、日本国内の機関で研修を受けた非母語話者教師の多くは初級後半から中級段階の日本語運用能力であると指摘されている(荒川・木山2005)。そこで、非母語話者教師にも分かりやすい文法カテゴリーを示すことが重要であると言える。

筆者らは、非母語話者日本語教師支援、中上級以上の学習者の自律学習支援のために、web上のツールとして、文法項目を検索すると、その意味、典型例、コーパスから抽出した用例を表示する「機能語用例文データベース『はごろも』」(以下、「はごろも」)を開発、公開を開始した(堀ほか2016) <<http://jreadability.net/hagoromo>>。現在「はごろも」では文法カテゴリーに関する情報は載せていないが、海外の非母語話者教師や学習者に使用されるためには、より分かりやすくなるよう日本語教育の立場に立った表示が必要であると考え、検討を進めている。

本発表では、日本語教育のためのより分かりやすい文法カテゴリー、品詞の立て方について検討の途中経過を報告し、聴者の方と議論を交わしたい。

### 2. 「はごろも」とその文法カテゴリーについて

#### 2.1 「はごろも」の文法項目

「はごろも」の文法項目は、下記の5種類の資料のうち2種類以上に出ているものを中心に採用した。全項目数は、1,848である。

- (1) 旧『出題基準』・・・初級から上級までの文法項目、活用形、機能語の類、敬語
- (2) グループジャマシイ(1998)『日本語文型辞典』(以下、『文型辞典』)
- (3) 国立国語研究所(1951)『現代語の助詞・助動詞』(以下、『助詞・助動詞』)
- (4) 森田・松木(1989)『日本語表現文型』(以下、『表現文型』)
- (5) 国立国語研究所(2001)『現代語複合辞用例集』(以下、『複合辞』)

旧『出題基準』と『複合辞』は全ての項目を取り入れた。各構成は表1の通りである。

表1：元となる資料から取り入れた「はごろも」の項目数

旧『出題基準』	『文型辞典』	『助詞・助動詞』	『表現文型』	『複合辞』
956	1,479	413	597	346

## 2.2 「はごろも」の文法カテゴリーと品詞

「はごろも」は初級から上級までの文法項目を網羅するため、初級で扱う活用形式、「かもしれない」「～に～がある（存在文）」のようないわゆる文型、「とはいえ」のような機能語の類、「お～になる」「お～する」といった尊敬表現、謙譲表現、さらには疑問詞疑問文のような文レベルの項目も含んでいる。これらの整合性を保つため階層構造を持つカテゴリー分類を採用した。まず最上位の概念は、多様なレベルを含むことから、「文法機能」と呼ぶことにした。

### 2.2.1 活用

旧『出題基準』には、形容詞、形容動詞、動詞、名詞述語文に関わる活用形式が「活用」として記載されている。日本語教育においては、語幹に助動詞、接続助詞を含む活用語尾がついた形を活用形として提示することが一般的である。また、特に初級の指導においては、活用形自体の理解、正確な産出を目標とする授業活動もあるため、表現意図とは別の項目として立てる意味があると考えられる。そこで、「活用」として品詞とは異なるカテゴリーを作成した<sup>注1</sup>。

### 2.2.1 敬語

敬意表現には、「めしあがる」のような語レベルのものから、「お～する」のように複数語にまたがるもの、「ていただけますか」のように複数語が結合し、文末の表現となっているものまで多様である。日本語教育においてはこれらを別カテゴリーとするより、同じカテゴリーに含めたほうが分かりやすい。そこで、品詞に関わらない「敬語」というカテゴリーを作成した。

### 2.2.2 文型

木村ほか（1989）では、「文型」を「言語単位としての文を構造の面、及び話し手の表現意図の面の両面から類型化した」ものとして、「Nです。/Nではありません」「-はAです」「(様態)そうです」「～ても～」などを挙げている。日本語教育の指導においては、文の助詞、述部を含めた文型という形での指導が有効であろう。

しかし、そうすると、「はごろも」のかなりの項目が文型となってしまう、文の中でのどの要素として働くのかを明確に示すことができない。

そこで「はごろも」では、文の類型として捉えられる「～は～が～」「～は+疑問詞疑問文」などと、「複数の語が慣用的に結びつき、その結合が比較的固定化している連語」（砂川 2002）のうち、「行こうが行くまいが」の「～ようが～まいが」<sup>注2</sup>のように「統語的な節の型を取り出すことのできる」（同前）ものとして文型とする。すなわち、①2つ以上の要素からなり、機能語ではないもの。②異なる品詞にまたがる複数の要素からなる固定的表現で、活用しないで使うものである。

### 2.2.3 品詞

品詞とは、「単語を文法的な性質によって分類したもの」（日本語記述文法研究会 2010:93）とし、「動詞、形容詞（イ形容詞・ナ形容詞）、名詞、副詞、連体詞、助詞、助動詞、接続詞、感動詞」を立てる。動詞は、一般、補助動詞、複合動詞からなる。形容詞は、イ形容詞、ナ形容詞からなる。名詞は、一般、形式名詞からなる<sup>注3</sup>。助詞は、格助詞、取り立て助詞、並立助詞、接続助詞、終助詞、間投助詞、準体助詞からなる。

また、連体詞である「この・その・あの」、副詞である「こう、そう、ああ」、名詞である「これ、それ、あれ」などと、「どの」「どう」などの疑問語とを合わせて「こ・そ・あ・ど」がそろっているものを「指示詞」とする。指示詞には、「どこか」のような不定語<sup>注4</sup>は含まない。

さらに、「A さ」「A がる」「N めく」「V がたい」のように語幹について1語をなし、一定の意味を加えるものを「接辞」とする。「以外」「以内」のように接辞よりは意味が明確であるが独立して使用されないものを「造語成分」とする（山下1995）。

#### 2.2.4 連語

「について」「たところで」「かもしれない」といった複数の語が、「全体として一まとまりとなって、個々のもともとの意味の組み合わせ以上の一種の辞的な意味を担うもの」を「複合辞」と呼ぶ（国立国語研究所2001：1）。これらは、「について」など助詞に相当するもの、「たところで」のように接続助詞に相当するもの、「かもしれない」のように助動詞に相当するものなどがある。文の構成要素としての文法的な性質を示すことを目標とする「はごろも」の場合には、「複合辞」としてのカテゴリーを立てるより、それぞれ「助詞」「接続詞」「助動詞」の下位に位置づけるほうが理解しやすいと考え、それぞれ「助詞：連語」「接続助詞：連語」「助動詞：連語」とする。他の品詞においても、同様に下位に連語を置くことにする。

以上をまとめると、次ページ図1のようになる。

### 3. 今後の課題

今後、web ツールで利用者のフィードバックを集めて役立つかどうか確認しながら改訂を進めていきたい。また、海外での研究発表などを通して、非母語話者教師・日本語学習者から直接の意見を聞き、改訂していきたいと考えている。

注1：現在「はごろも」には旧『出題基準』にあるものだけを載せているが、今後改訂し、『Situational Functional Japanese』に準拠して、活用形式を挙げる予定である。

注2：砂川（2002）では、「行こうが行くまいが」から抽出される連語を「～が～が」としている。

注3：文法上、副詞として働くものもあるが（例：いつ）、一般名詞の「今日」と同様に名詞とする。

注4：益岡・田窪では「疑問語」に「か」「も」「でも」がついて不定の対象を示す語を「不定語」とするが、「はごろも」では、「いつか」は「どこか」など他の語とはふるまいが異なり注意が必要であるため、1つにまとめず個々に文法項目として取り上げる。

#### 【参考文献】

市川保子（2001）『日本語教育のための文法用語』国立国語研究所

荒川みどり・木山登茂子（2005）「非母語話者日本語教師向け文法解説の試み」『国際交流基金日本語教育紀要』(1).189-200.  
国際交流基金

木村宗男・阪田雪子・窪田富男・川本喬編（1989）『日本語教授法』桜楓社

グループジャマシイ（1998）『日本語文型辞典』くろしお出版

国際交流基金（2013）『海外の日本語教育の現状 2012年度日本語教育機関調査より』くろしお出版

国際交流基金・日本国際教育支援協会（2002）『日本語能力試験出題基準【改訂版】』凡人社

国立国語研究所（1951）『現代語の助詞・助動詞』国立国語研究所

国立国語研究所（2001）『現代語複合辞用例集』国立国語研究所

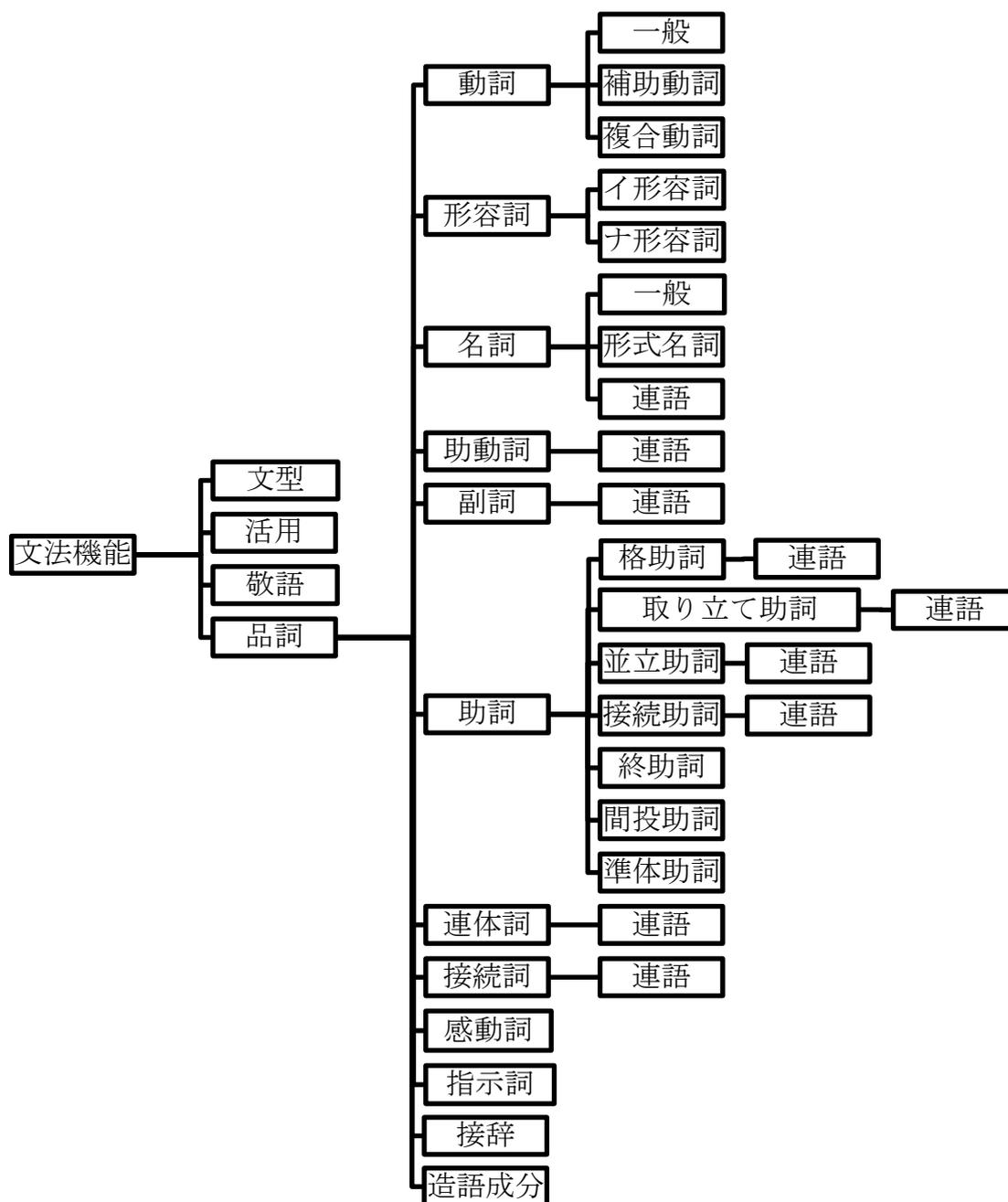


図1 「はごろも」の文法カテゴリーの階層構造

注：カテゴリーの下位に「連語」を置くものは、単独の語とともに、連語も含むという意味である。

砂川有里子（2002）「国語辞書における文法的連語について-辞書と利用者に関する調査報告-」玉村文郎編『日本語学と言語学』157-173 ページ 明治書院

筑波ランゲージグループ（1992）『Situational Functional Japanese』凡人社

日本語記述文法研究会（2010）「第2部第2章 品詞」『現代日本語文法』1、くろしお出版

堀恵子・李在鎬・長谷部陽一郎（2016）「機能語用例文データベース『はごろも』について」『計量国語学』30巻1号、275-285 ページ、計量国語学会

益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法-改訂版-』くろしお出版

森田良行・松木正恵（1989）『日本語表現文型 用例中心・複合辞の意味と用法』アルク

山下喜代（1995）「<研究報告>国語辞典における語構成要素の扱いについて」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』7、77-108 ページ、早稲田大学日本語研究教育センター